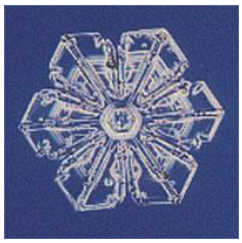
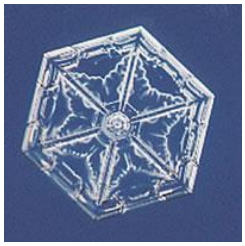
１月１４日　　どうして雪が降るのでしょうか

　寒い日が続いています。日本の各地で大雪が降り、大変な思いをされているということがニュース見ることができます。一方で、東京では、雪の降る日は少ないので、皆さんは、雪が降ると、ワクワクする気持ちになるのではないでしょうか。

　さて、雪ですが、雲の中でできているというのを知っていますか。雲の中のちいさな水滴、雲つぶが、雪の元となります。大きさは、０．００１mm～０．０１mmくらいの大きさ、髪の太さの１／５くらいの大きさです。この雲つぶが、上昇気流、上に昇る空気に乗って、気温―４０℃以下になる地上１万mほどになると、氷のつぶ「氷晶」になります。この氷晶が今度は下に落ちてくるときに、氷晶同志や、周りの雲つぶを合体させながら成長をすると「雪の結晶」になります。

　この写真を見てください。これが、雪の結晶です。白く降り積もる雪ですが、一つ一つのつぶは、こんな形をしています。気温や、水の量など、様々な条件によって結晶の形は変わり、１００種類以上の形があることが分かっています。

　この美しい「雪の結晶」ですが、ほとんどの場合、地上近くの温度が高いので、溶けて雨になってしまいます。でも、気温が低い、つまり寒い冬のときには、溶けずに、雪として降ってくるというわけです。でも、東京の冬の空は、雲一つない青空、快晴の日が多いです。青空の美しさ、清々しさを感じますが、雪は降らないということなのです。

　雪の結晶を見ると、自然の美しさ、そして、不思議さを感じます。この他にも、自然の美しさや不思議さを感じることはたくさんありそうです。ぜひ、みなさんも見つけてみてください。